

# 漢代博士弟子制度の展開

西 川 利 文

## はじめに

前漢の元朔五年（前一二四）、当時丞相であった公孫弘は、その年の六月に発せられた武帝の勸学の詔をうけて太常孔臧らと協議し、学問興隆のための具体策を上奏した。それは武帝によって制可され、新たに功令に付け加えられた。ここに、公孫弘の上奏に基づいて博士弟子制度が創始されたのである。これによって博士には、正式に弟子が配当されることになり、これら学生に将来官吏として必要な知識を修得させることが義務づけられた。すなわち博士弟子制度は、国家レベルでの教育制度であり、官吏養成制度であった。そしてこれは、政治の学あるいは国家の学である官学として認められた儒学<sup>(1)</sup>を全国に普及していく原動力となったのである。

博士弟子制度を規定した公孫弘の上奏文については、前稿<sup>(2)</sup>ですでに述べた。そこで、前に明らかにした創始当初における博士弟子制度の内容と目的を確認しておこう。<sup>(補註)</sup>

その内容は、第一に博士弟子の定員は五十人であり、それについては太常が十八歳以上で儀狀端正な者を当時管轄していた五つの陵県の中からそれぞれ十人ずつ選ぶ。その他に定員外として、郡国の守相にも管轄下の住民の中から

学問好きで優秀な者を選び太常へ送り届けさせた。つまり博士弟子には定員分の太常選の者と定員外の郡国選の者とがあったことになるが、彼らは全て「復其身」(徭役免除)の特典が与えられていた。なお定員外の郡国選の博士弟子も加わることから、当時太学で勉強していた者は実際には五十人以上いたと思われる。第二に博士弟子は一年間の学生生活を終えると、卒業試験として「射策」が課され、その成績によって何らかのポストが与えられ、合格のレベルに達しなかった者は博士弟子たる資格を剝奪された。なおここで、次の一点は注意しておかなければならない。周知のように博士弟子制度は官吏登用法(以下、登用法と略す)の一種として機能するが、それは博士弟子に採用された時ではなく、射策受験によって何らかのポストが与えられる時のことである。またよく調べてみると、「博士弟子」と記されている者は実際には射策を受けていない。このことから、従来登用科目の名称として使われてきた「博士弟子科」「博士弟子員の科」というのは適当ではなく、博士弟子制度が登用法の一種として機能するために最も重要な部分をなす射策の名称をとって「射策科」とするのが適当と考える。そして第三に、上奏文の中に博士弟子制度とは直接関係しない文学掌故をも利用した郡国への属吏配置の規定が盛り込まれていることから、当初は文学掌故への任用に重きが置かれたと考えられる。

上奏文の内容は以上の通りであるが、公孫弘がこの上奏文によって目指したものは何であったのだろうか。まず博士弟子制度によって儒家的知識を持つ者——以下、これを「知識人」とする——を養成し、彼らを官僚機構の中に組み込んでいこうしたことは間違いない。さらに上奏文で官吏への採用を明示したことは、儒家的知識を持つことが官吏になるための有力な条件とされたことを意味し、博士弟子制度が仕官希望者に向学心を持たせることを目指した制度であったことが判明する。そしてこの目的が達成されれば、地方社会において広範に「知識人」が養成されることになろう。すなわち、公孫弘の上奏文の裏には、博士弟子制度創始による地方社会における広範な「知識人」養成という究極的な目的があったと考えられるのである。

ところで、右のような内容と目的をもって創始された博士弟子制度は、その後どのように展開していくのであろうか。これは本稿の主題であるが、これについてはじめて本格的に研究したのは、平井正士氏の「漢代の学校制度考察上の二三の問題」である。しかし前稿でもふれたように、氏の研究は博士弟子の文学掌故への任用という点に重点が置かれており、博士弟子制度の展開を考えるうえでは不十分であると考え<sup>(4)</sup>る。そこで本稿では、論を進めるにあたって、前稿の最後で指摘した次のような二つの指標を設定しておきたい。

第一に射策科の登用法としての機能の喪失であり、第二に博士弟子制度遂行のために設置された太学の機能の変質である。

まず『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』の兩漢に関する正史四書を見ると、射策科によって官吏となった者は、前漢末を最後として以後確認できなくなる。<sup>(5)</sup>このことについては早くに馬端臨も気付いていたようで、彼は『文獻通考』卷四〇学校考一において「以博士弟子入官」の項目を前漢部分で立てているにもかかわらず、後漢部分では立てていない。これは後漢ではすでに、博士弟子制度が官吏養成制度として機能するための重要部分である射策科が、十分に機能していなかったことを物語るのである。しかしそれにもかかわらず、博士弟子制度を遂行していく機関として設置された太学の学生数は増え続け、後漢の桓帝の頃には三万人に達した。これは太学が官吏養成機関から変質して、他の何らかの機関として機能するようになったことを物語るのである。

この二つの指標のうち特に重要なのは、第一の射策科の登用法としての機能の喪失であろう。何故なら、射策科が存在しなければ、博士弟子制度は本来の官吏養成制度として機能しなかったと考えられるからである。そこで本稿では、二つの指標の中でも射策科の変遷を中心として、博士弟子制度の展開過程を考察することにしよう。<sup>(6)</sup>

## 一 射策科の展開

創始当初の博士弟子制度に関する具体的内容を規定した公孫弘の上奏文は、『史記』卷一二一と『漢書』卷八八の兩儒林伝に同じものが記載されている。ところがこの兩文を照合してみると、この間に若干の文字の異同があり、そのうち二三の点で全体の文意解釈に支障をきたすものがある。そこで前稿で武帝の詔を除いた博士弟子制度に直接關連する部分を校定したが、今回この上奏文のどの部分がどのように展開していくかを検討するにあたって、前稿で校定した原文のみを再び掲げておきたい。そしてこれ以後本稿では、公孫弘の上奏文で博士弟子制度を直接規定したこの部分を「規定」と呼ぶことにする。

I 謹与太常〔孔〕臧・博士平等議曰、

A 聞三代之道、鄉里有教、夏曰校、殷曰序、周曰庠。<sup>(序)</sup>其勸善也、頭之朝廷、其懲惡也、加之刑罰。故教化之行也、建首善自京師始、由内及外。<sup>(縣)</sup>今陛下昭至德、開大明、配天地、本人倫、勸学脩礼、<sup>(興)</sup>崇化厲賢、以風四方、太平之原也。

B 古者、政教未洽、不備其礼、請因旧官而興焉。

(a) 為博士官置弟子五十人、復其身。太常挾民年十八已上儀狀端正者、補博士弟子。<sup>(以)</sup>

(b) 郡国県道邑有<sup>(官)</sup>好文学、敬長上、肅政教、順鄉里、出入不悖所聞者、令相長丞上属所二千石。二千石謹察可者、<sup>(當)</sup>当与計偕、詣太常。得受業如弟子。

(c) 一歲皆輒試。<sup>(課)</sup>(1)能通一芸以上、補文学掌故缺。(2)其高第<sup>(第)</sup>可以為郎中者、太常籍奏。(3)即有秀才異等、輒以名聞。(4)其不事学若下材、及不能通一芸、輒罷之。而請諸能<sup>(不称者罰)</sup>称者。

Ⅱ 臣謹案詔書律令下者、明天人分際、通古今之義<sup>(註)</sup>、文章爾雅、訓辭深厚、恩施甚美。小吏淺闇、不能究宣、無以明布諭下。<sup>(以治礼掌故)</sup> 治礼次治掌故、以文学礼義為官、遷留滯。

C 請選掎其秩比二百石以上、及吏百石通一芸以上、補左右内史・大行卒史。比百石已下、補郡国太守卒史。皆各

二人、辺郡一人。先用誦多者、若不足、乃掎掌故補中二千石属、文学掌故補郡属、備員。

Ⅲ 請著功令、佗如律令。<sup>(註)</sup>

最初に、第一の指標として挙げた射策科が登用法としての機能を喪失していく過程で、射策科にどのような変化が起こってくるのかを見てみよう。次頁に掲げる一覧表は、射策科によって官吏となった者を、博士弟子に採用された時期順に関連史料とともに並べたものである。

一覧表を見てまず気になるのは、射策科によって官吏となった者が九名しかないことであろう。この数の少なさは、はじめにも述べたように後漢に射策科によって官吏となった者がおらず、登用経路の判明する者が比較的少ない前漢に限られるという史料制約にもよる。しかし、前漢に限って最初にどのような登用法によって就官するかを見ても、孝廉科によって就官した者は一三名おり、また不定期的な登用法である賢良方正科などの制科が一五名、辟召制が二〇名などとなり、<sup>(註)</sup> 相対的に見ても射策科によった者はやはり少ないといわざるを得ないのである。ところが射策科には、その創始当初の内容を示した「規定」がある。これをもとに、一覧表に掲げる史料並びにその他の関連史料を参照すれば、数少ない例の中からも射策科及び博士弟子制度の展開過程の検討は十分に可能となると考える。

次に射策科はどのような登用法であるのかを確認しておこう。それは「規定」のBの(c)部分からわかる。これによると、博士弟子は一年間の勉学を終えると全ての者が必ず卒業試験である射策を受け、不合格となった者以外には何らかのポストが与えられた。とすれば、射策科は毎年行われることになり、郡国から毎年一定数の人材を官僚機構に

時期 氏名	關連史料	出典
兒寬	<p>歐陽生教千乘兒寬。兒寬既通尚書、以文学応郡舉、詣博士受業、受業孔安國。(中略)以試第次、補廷尉史。是時張湯方鄉学、以為奏讞掾、以古法議決疑大獄、而愛幸寬。(中略)及湯為御史大夫、以兒寬為掾、薦之天子。</p> <p>兒寬、千乘人也。治尚書、事歐陽生。以郡國選詣博士、受業孔安國。(中略)以射策為掌故、功次、補廷尉文学卒史。(中略)時張湯為廷尉、廷尉府尽用文史法律之吏、而寬以儒生在其間、見謂不習事、不署曹、除為從史、之北地視畜數年。還至府、上畜簿、会廷尉時有疑奏、已再見卻矣、掾史莫知所為。寬為言其意、掾史因使寬為奏。奏成、誦之皆服、以白廷尉湯。湯大驚、召寬与語、乃奇其材、以為掾。(中略)湯由是鄉学、以寬為奏讞掾、以古法義決疑獄、甚重之。及湯為御史大夫、以寬為掾、举侍御史。</p>	史一二二 漢五八
昭帝期 蕭望之	<p>蕭望之字長倩、東海蘭陵人也、徙杜陵。家世以田為業、至望之、好学、治齊詩、事同県后倉且十年。以令詣太常受業、復事同学博士白奇、又從夏侯勝問論語・礼服。京師諸儒称述焉。是時大將軍霍光秉政、長史丙吉薦儒生王仲翁与望之等数人、皆召見。先是左將軍上官桀与蓋主謀殺光、光既誅桀等、後出入自備。吏民当見者、露索去刀兵、兩吏挾持。望之独不肯聽、自引出閤曰、不願見。吏牽持匈匈。光聞之、告吏勿持。望之既至前、說光曰(中略)於是光独不除用望之、而仲翁等皆補大將軍史。三歲間、仲翁至光祿大夫給事中、望之以射策甲科為郎、署小苑東門候。</p>	漢七八
匡衡	<p>丞相匡衡者、東海人也。好說書、從博士受詩。家貧、衡傭作以給食飲。才下、数射策不中、至九、乃中丙科。其經以不中科故明習。補平原文学卒史。数年、郡不尊敬。御史徵之、以補百石属薦為郎。</p>	史九六

※出典の欄で、史は『史記』、漢は『漢書』を指し、数字はそれぞれの巻数を示す。

成帝期		元 帝 期		宣 帝 期		
房 鳳	馬 宮	王 嘉	翟方進	召信臣	何 武	
房鳳字子元、不其人也。以射策乙科為太史掌故。太常掾方正、為潁令都尉。	馬宮字游卿、東海戚人也。治春秋嚴氏、以射策甲科為郎。	王嘉字公仲、平陵人也。以明經射策甲科為郎。	翟方進字子威、汝南上蔡人也。家世微賤、至方進父翟公、好学、為郡文學。方進年十二三、失父孤學、給事太守府為小史、号遲頓不及事、數為掾史所冒辱。（中略）方進既厭為小史、聞蔡父言、心喜、因病帰家、辞其後母、欲西至京師受經。母憐其幼、随之長安、織履以給方進読、経博士受春秋。積十餘年、経学明習、徒衆日広、諸儒称之。以射策甲科為郎。	召信臣字翁卿、九江寿春人也。以明經甲科為郎。	何武字君公、蜀郡郫県人也。（中略）宣帝循武帝故事、求通達茂異士、召見武等於宣室。上曰、此盛徳之事、吾何足以当之哉。以〔王〕褒為待詔、武等賜帛罷。武詣博士受業、治易。以射策甲科為郎、与翟方進交志相友。	匡衡字稚圭、東海承人也。父世農夫、至衡好学、家貧、庸作以供資用、尤精力過絶人。諸儒為之語曰、無説詩、匡鼎来、匡説詩、解人頤。衡射策甲科、以不応令除為太常掌故、調補平原文學。学者多上書薦衡経明、当世少雙、令為文學就官京師、後進皆欲從衡平原、衡不宜在遠方。事下太子太傅蕭望之・少府梁丘賀問、衡対詩諸大義、其対深美。望之奏衡経学精習、説有師道、可觀覽。宣帝不甚用儒、遣衡帰官。而皇太子見衡対、私善之。会宣帝崩、元帝初即位、楽陵侯史高以外属為大司馬車騎將軍、領尚書事、（中略）辟衡為議書史、薦衡於上、上以為郎中。
漢八八	漢八一	漢八六	漢八四	漢八九	漢八六	漢八一

送り込む孝廉科と共通の性格を持つ登用法といえる。しかしそのポストを見ると、

(1) 太常の属吏である文学掌故(百石)

(2) 郎中(三百石)

(3) 徵召による六百石クラスの官

となり、この中に文学掌故という属吏への任用があることは、射策科が孝廉科などの登用法とは少しく性格を異にしていることを意味する。つまり一般に登用法とは、百石以下の属吏層や在野無官の者から二百石以上の官僚を選抜する時に適用される制度を指し、文学掌故への任用はその範疇に入らないのである。しかしこれも射策を受けた結果によって配当される地位であるから、各官庁の長官が自由裁量によって属吏を選ぶ辟召制の範疇にも属さないこととなる<sup>(10)</sup>。すなわち、射策科は属吏任用規定(文学掌故への任用)と本来の意味での登用法(官僚への登用)とが渾然一体となつた変則的な登用法である、といわざるを得ないのである。このことを正確に把握したうえで、本稿でも射策科を一種の登用法をみなすことにする。

さて、このように変則的な登用法である射策科は、前稿で述べたように、当初はその登用法としての性格を特色づける文学掌故への任用が主体になっていたものと思われる。そして次第にその主体が郎官への登用、つまり「射策甲科」へと移ってくるものと考えられるのである。この変化は、文学掌故に任用された者の中に端的に現われている。そこで次にこれについて、射策科によって文学掌故に任用された者が手がりとして検討してみよう。

一覽表の中で文学掌故に任用されたと考えられる者は、博士弟子制度創始当初の武帝期の兎寛、宣帝期の匡衡、成帝期の房鳳の三名であるが、実際には彼らは誰一人として文学掌故に任用されたとは記されておらず、兎寛は掌故、匡衡は太常掌故、房鳳は太史掌故に任用されている。しかし彼らがいずれも射策科によってその地位を与えられており、またいずれの掌故も太常に属する掌故であることは明らかなことから、彼らを全て「規定」である文学掌故とし



て取り扱うことも許されるであろう。<sup>(1)</sup>そこでまず、射策科の展開過程が如実に現れる兎寛と匡衡の場合について見てみよう。

最初に兎寛に関する記載を見ると、『史記』では、

既に尚書に通じ、文学を以て郡挙に応じ、博士に詣りて業を受け、業を孔安国に受く。

となっており、また『漢書』では、

尚書を治め、欧陽生に事う。郡国選を以て博士に詣り、業を孔安国に受く。

となっている。これら二つの史料によると、兎寛は博士弟子に選ばれる以前に欧陽生に師事し既に『尚書』についての専門知識を持っており、さらに太学で孔安国から『尚書』を学んでいることから、射策受験の時には相当の専門知識を持っていたものと思われる。しかしそれにもかかわらず、兎寛は文学掌故に任用されている。これは「規定」の一芸以上に通じた者という基準が、かなり高い知識水準の者でさえ最低水準を充たした者としかみなさなかつたことを物語る。そして兎寛の場合「以射策為掌故」とあるのみで、後のように射策の成績に甲科・乙科・丙科のランクがなかつたことは注目され、彼のような者でさえ文学掌故にしか任用されなかつたのであるから、高第にあたる郎官やそれ以上の官僚となる者はほとんどなかつたものと思われる。すなわち当初は、射策に合格した博士弟子は学問水準に関係なく、「能通一芸」として文学掌故に任用することが射策科の主体となっていたと考えられるのである。

次に、匡衡に関する記載を見ると、『史記』では、

才下にして、数しば射策するも中らず、九たびに至りて、乃ち丙科に中る。

とあり、彼は学問水準が低く何度も射策をうけて九回目でやっと丙科に合格したことになっている。そして、匡衡は何度も射策を受けている間に経学に通じるようになった（其経以不中科故明習）のであるから、兎寛のように博士弟子となる以前に一經にある程度通じ、さらに太学で同じ経学を学んだというのではない。ただ学問水準の高低という

のは、相対的なものであり、何を基準としているかで変化するから、直ちに兎寛との比較はできないものの、匡衡の場合『漢書』には、

射策甲科なるも、令に応ぜざるを以て、除されて太常掌故と爲る。

とあることに注意しなければならない。つまり彼は、射策甲科の基準に合格しなかった（「不応令」）ので太常掌故に除されているのである。このことは、匡衡が射策を受けた宣帝の頃には、博士弟子が射策を受ける場合、学問水準のいかにかわらず彼のように「才下」である者も含めて「甲科」が基準となっていたことを物語る。すなわち、兎寛と匡衡との例は、射策科の主体が武帝期には文学掌故への任用であったものが、宣帝期になると甲科による郎官への登用に变化してきたことを物語るのである。この変化は、属吏任用制度と本来の意味での登用法とが渾然一体となっていた射策科が、遅くとも宣帝期以後には純然たる登用法として定着していたことを意味する。このように考えると「以射策乙科為太史掌故」とある房鳳の場合も、この文の前に「射策甲科、以不応令」が落ちているとみなせる。また射策甲科の例は昭帝期の蕭望之に見られ、「規定」には見えない甲科の出現が射策科の主体の移行を暗示しているとも考えられる。しかしいづれにしても、最初から射策科が射策甲科を主体とし、純然たる登用法として機能していたのではないことだけは確実である。

ところで、射策科の基準が射策甲科に移ったといっても、少なくとも前漢末までは射策科の変則的な登用法としての性格には変化はない。実際に匡衡や房鳳は「規定」の文学掌故にあたる太常掌故や太史掌故に任用されているし、また平帝期の任用規定にも「歳課、甲科四十人為郎中、乙科二十人為太子舍人、丙科四十人補文学掌故」（『漢書』儒林伝）とあり、やはり太常の属吏である文学掌故への任用規定がある。<sup>(12)</sup> すなわち、いま射策科が登用法として定着したというのは、射策科の主体が属吏への任用から郎官への登用に移ったことをいうのであって、射策科から文学掌故への任用がなくなったのではない。それでは、射策科が何故このように純然たる登用法として定着してくるのである

うか。その要因としては次の二つが考えられる。第一に射策科の主体が甲科へ移行せざるを得なかったという必然性であり、第二に地方社会における「知識人」の存在である。この手がかりとなるのもやはり、前に挙げた文学掌故に任用された三名である。

まず第一の要因について、彼らが文学掌故となつてからどのような経路をたどつたのかを検討してみよう。「規定」によると、文学掌故の転出先としては中央官庁や郡国の属吏の地位が用意されていた。<sup>(13)</sup>最初に「規定」通りの経路をたどつた者を見ると、兎寛は「規定」の通り廷尉文学卒史に任用されると、その当時の廷尉であつた張湯が御史大夫となつたのにもなつて、彼はそこに辟召され張湯の察掾によつて侍御史となつてゐる。また匡衡は、やはり「規定」に従つて平原文学となると、学者仲間の推薦によつて大司馬車騎將軍の史高に辟召され、さらに史高の推薦により元帝の徵召をうけて郎官になつてゐる。次に他に転出することがなかつた房鳳の場合を見ると、所屬の長官である太常から不定期的な登用法である方正に察掾され県令となつてゐる。このことから「規定」の通りに転出するか否かにかかわらず文学掌故に任用された者の場合、いずれも射策科という登用法の適用をうけながらも、再び他の登用法によつて察掾されなければ就官できなかったことが明らかとなる。これは、登用法の制度上の性格を考えれば当然のことである。何故なら、射策科を変則的な登用法として性格づける文学掌故への任用は属吏への任用であり、また「規定」による転出先も属吏であり、改めていうまでもなく、属吏が二百石以上の官僚に就官しようとすれば登用法の適用をうけなければならなかつたからである。ここに、射策科が純然たる登用法へ変化してくる必然性があると思われる。すなわち、射策科の変則的な部分は登用法としては欠陥であつたといえ、この結果、射策科が登用法として機能するためには、変則的な部分である文学掌故への任用が次第に影を薄めていき、結局は射策科の主体が甲科による郎官の登用へと移らざるを得なくなるのである。

このような射策科の主体移行の必然性に拍車をかけたのが、地方社会における「知識人」の増加であらう。それは

匡衡の場合に如実に現われている。匡衡は平原文学として派遣されたが、その結果は「郡、尊敬せず」というように郡の属吏層によるその存在の無視であった。これは、本来属吏層に他郡出身者が容易に入り込むことができなかったという当時の実情にもよろう。<sup>(14)</sup>しかしそれよりも、博士弟子制度が軌道に乗り武帝期以後地方社会において「知識人」が着実に養成されてきて、匡衡が属吏として派遣された当時には、すでに地元出身の「知識人」が多数属吏として存在していたことによると考えられる。すなわち、博士弟子制度の究極的な目的である地方社会における「知識人」養成が達成された時、そのために重要な役割を果たした文学掌故の新たな転任経路は塞がれ、これによって射策科の主体は郎官への登用に移っていくのである。

さて、右の二つの要因は相互に密接に関連しているが、射策科の主体を変化させる主たる要因となったのは、第二の要因であろう。前稿で述べたように、博士弟子制度創始当時、地方郡国に儒家的知識を身に付けた属吏が少なく儒学を政治理念とした中央集権的支配が貫徹しておらず、それを解決するためにこの制度を設け、最終的には「知識人」を地方社会でも広範に養成しようとし、その前段階として、現状を早急に打開するために太学で属吏予備軍である文学掌故を養成しようとしたのである。従って、地方社会において「知識人」が順調に養成され、彼らが地元の属吏となっていけば、わざわざ中央政府から文学掌故を属吏として派遣する必要がなくなり、主体が甲科つまり郎官への登用に移行していくことになる。すなわち、当初は早急に現状を打開するために、登用法としては欠陥であると知りつつも射策科にあえて文学掌故への任用規定を盛り込み、むしろそれを主体としたが、博士弟子制度の究極的な目的が達成されてくるとともに変則的な部分は次第に必要性を失っていき、射策科は自然に本来的な登用法としての性格を強めていくのである。この時期は匡衡の例から遅くとも宣帝期であることは確実である。しかし前稿で挙げたように、明経なることよって郡吏となった者が昭帝期以後少なからず輩出されていることから考えると、博士弟子制度創始以後、着実に地方社会で「知識人」が養成され、昭帝期から宣帝期にかけての間に多くの「知識人」が属吏層

に存在してきたと考えられる。

このように考えると、博士弟子制度の所期の目的はかなり早い時期に達成されていたことになる。早くから史料には射策甲科によって郎官に就官した者が多く見られるのも、このような事情によるのであろう。これによって、当初は現状打開のために重視された文学掌故も、地方社会における「知識人」輩出に伴って次第に重要性が薄れ、たとえ「規定」の通りに文学掌故から郡の属吏として派遣されたとしても、結局彼らは地元出身の属吏からは「尊敬されざる」存在として、無視されるような存在となっていかなるを得なくなった。そしてそれ以前においても、文学掌故に任用されれば再び他の登用法によらなければ昇進できなかったとすれば、右の三名の文学掌故から昇進していった者の背後には、何らの登用機会にも与ることなく文学掌故あるいは転出先の属吏のままで、歴史上から消えていったしまった者が大量に存在したことを推測させるのである。しかし、彼らの存在は決して無意味ではなかったであろう。何故なら、博士弟子制度が地方社会における「知識人」養成を究極的な目的としていたとすれば、文学掌故が郡国の属吏として派遣される時に彼らに負わされた任務は、地方長官を補佐するとともに、儒学の必要性を仕官希望者に対して身をもって知らしめることであつたに違いない。<sup>(15)</sup>つまり彼らの存在がなければ、博士弟子制度の究極的な目的の達成もそれほど順調にいかかつたと考えられるのである。<sup>(16)</sup>

## 二 「規定」の変質

### (一) 射策規定の変質

さて、射策科の主体が甲科に移り恒常的に郎官を輩出するようになったことは、純然たる登用法として定着したのであるから射策科自体にとっては発展であるが、博士弟子制度全体を通して見た時、それは博士弟子制度が一つの使

命を終えたことを意味する。つまりそれは博士弟子制度の究極的な目的が達成されたことを意味し、それはまた「規定」の最も主要な部分であったⅡの部分の存在意義が失われることを意味するからである。この時、博士弟子制度は他を補完するための制度としてではなく、独自の機能を持った制度となる。その表われが射策科の主体の移行であるが、この過程で博士弟子制度自体にも変化が見られる。そこでまず、「規定」に見られる変質について考察してみよう。

最初に、射策科と直接関連する射策規定の変化について検討してみよう。「規定」では「一歳皆輒試」となっており、博士弟子に採用された者は一年間経学を学習し、全ての者が卒業試験である射策を受けることになっていた。しかし前稿で述べたように、「博士弟子」と明記されている者は射策科によらずに官僚に登用されていると思われる<sup>17</sup>。それを確認しておく、まず伏湛の場合は博士弟子となると五遷して王莽の時に繡衣執法となったとあるだけでその登用経路は明らかではないが、終軍は博士弟子に選ばれて長安に至ると直ちに上書しそれが武帝に認められて謁者給事中となっており、息夫躬もまた成帝の末に博士弟子となり哀帝即位当初に上書して光禄大夫左曹給事中に抜擢されている。つまり、終軍と息夫躬がいずれも上書したことによって官を得ていることから、博士弟子には太学在学中に上書する機会が与えられており、場合によっては官僚として登用されることもあったことが明らかになる。さらに太学在学中の博士弟子には、上書の他にも射策科以外の登用経路によって就官する機会があった。一覧表に掲げた蕭望之の記事を見ると、そこには、

この時、大將軍霍光政を秉り、長史丙吉、儒生の王仲翁と望之等數人を薦め、皆召見す。……ここに於いて、光、独り望之のみを用いずして、仲翁等を皆大將軍の史に補す。

とある。これは大將軍の霍光が長史の丙吉の推薦した王仲翁・蕭望之をはじめとする数人の博士弟子（Ⅱ儒生）を辟召しようとした時の記事であり、この時は霍光が左將軍の上官桀らを誅殺した事件の直後にあたり、蕭望之はこの事件のことで霍光を批判したことから彼のみ辟召されず、他の王仲翁らの博士弟子は全て大將軍府に辟召されている。と

すれば、太学在学中の博士弟子には上書のみならず公府による辟召の機会もあったことになる。つまり、「規定」では博士弟子に選ばれば必ず一年間太学で勉強して射策を受けることになっていたが、実際には博士弟子には太学在学中に上書や辟召などによる登用の機会があり、博士弟子に採用された全ての者が必ずしも射策を受ける卒業時まで在学していなかったことになるのである。そしてその機会は、終軍の例から博士弟子制度創始当初から存在していたものと考えられる。

ところで、太学在学中に上書したと判断した息夫躬の場合、博士弟子に採用されてから上書するまでにかなりの時間があり、果たして太学在学中に上書したのかが問題になるが、それを解決してくれるのが蕭望之と翟方進の記事である。まず蕭望之の記事を見ると、前に引いた記事に続いて、

三歳の間、「王」仲翁、光禄大夫給事中に至り、望之、射策甲科を以て郎と為る。

とあり、公府による辟召の機会がありながらその機会に与らなかつた蕭望之は、射策甲科によって郎官となるまで三年間も太学に在学している。そして翟方進は、

博士を経て春秋を受け、積むこと十餘年にして經学明習し、……射策甲科を以て郎と為る。

とあることから、蕭望之よりもはるかに長く、射策を受けるまで十年以上も太学に在学している。このことから、「規定」の一年間という太学在学期間は守られず、実際にはそれ以上在学することも可能であり、息夫躬も上書するまでの数年間は太学に在学していたと見て間違いあるまい。

そしてさらに注目すべきは匡衡の例である。『史記』によると彼は九回目でやっと丙科に合格しており、射策は毎年一度行われるから最低十年間太学に在学したことになるが、射策を九回も受けたということは、「不能通一芸、輒罷之」という規定が次第に守られなくなり、太学在学中であれば何度でも射策受験が可能であったことを物語る。また一方、蕭望之や翟方進は、射策甲科によって郎官になるまでの数年間の在学期間中に一度も射策を受けた形跡がな

いことから、毎年一回の射策は全ての博士弟子が受けなければならないという規定も、実際には本人が受けようと思わなければ必ずしも受ける必要がなかったことになる。そして修学年限が一定せずまた射策を必ずしも受験する必要がなかったことからすれば、数年間太学<sup>(18)</sup>に在学しながらも射策を受けずに太学を離れていくことも可能となる。馮野王・張禹・梅福などがその例である。すなわち、「規定」の射策科の内容を示したBの(c)部分は次第にその通りに行われなくなり、長期在学が可能となったことによって、博士弟子の一部の者が、射策を受けずに太学在学中に射策科以外の登用法で就官したり或いは退学したりして抜けていく一方で、また一部の者は何度も射策を受けて昇進の機会をつかもうとしたのである。<sup>(19)</sup>

## (二) 博士弟子採用規定の変質

射策規定が変質していた時、博士弟子の採用規定を示した「規定」のBの(a)(b)部分も変質し、特に元帝期におけるこの部分の変質は、博士弟子制度に重大な影響を与えることになる。

まず「規定」では、博士弟子を選ぶ権限が太常と郡国の守相に与えられていたが、元帝の中期に至って太常がその権限を失うと考えられる。それは『漢書』卷九元帝紀の永光四年十月(前四〇)の条に「諸陵、分けて三輔に属せしむ」とあり、また卷一九百官公卿表上の奉常(＝太常)の条に「元帝永光元年(前四三)、諸陵邑を分けて三輔に属せしむ」とある記事からうかがえる。鎌田重雄氏によるとこの記事は、元帝の時に陵邑への強制移住による民心の動揺を恐れた政府が、皇帝陵に陵邑を設置しなくなった機会に、陵邑の管轄を太常から三輔(京兆尹・左馮翊・右扶風)にそれぞれ分属させたことを述べたものとし、また二つの記事で陵邑の三輔への移管の時期がずれるが、永光四年が正しいとする<sup>(20)</sup>。陵邑の移管については若干の問題を残しつつも、いまは鎌田氏によるとして、この記事をさらに一步踏み込んで太常の権限について考えみると、前稿で述べたように、太常が孝廉や博士弟子などの察挙権を有していたの



は、陵県を管轄するという牧民官としての職掌をも兼ねていたからであった。いまそれを三輔の管轄下に移したとすれば、太常は牧民官としての職掌を失い当然孝廉の察挙権を失うことになり、さらに太常が牧民官であることによつて認められていたその他の察挙権も失うと考えられる。例えば宣帝の本始四年（前七〇）四月の詔では、

令三輔・太常・内郡国举賢良方正各一人。（『漢書』卷八宣帝紀）

とあったものが、陵県の管轄が太常から三輔へ移されてから以後の成帝の建始二年（前三一年）二月の詔では、

詔三輔・内郡举賢良方正各一人。（『漢書』卷十成帝紀）

となっている。賢良方正の察挙権については、太常は九卿の一つとして与えられることもあるが、いま掲げた賢良方正察挙に関する二つの詔は明らかに郡国を対象に出されたものであり、ここから元帝期以後太常が牧民官として認められていた察挙権を失ったことは明らかである。とすれば太常は、この時に博士弟子を選ぶ権限も失ったと見て間違いない、これ以後博士弟子は郡国選の者のみになったはずである。

ところで、前稿で郡国選の博士弟子は定員外に置かれていたと考えたが、太常が博士弟子を選ぶ権限を失ってから以後も、郡国選の博士弟子は定員外として扱われたかといえ、決してそうではない。『漢書』儒林伝には「平帝の時、王莽政を乗り、元子の子を増して業を受くること弟子の如くし、以て員と為すこと勿からしむ」とあり、平帝の時に定員外として元士（六百石）以上の子弟を博士弟子に採用したのであるから、少なくとも永光四年以後は郡国選の博士弟子が定員分として扱われていたことになる。しかしそれが定員分に繰り込まれてくるのは、もう少し早く博士弟子の定員が武帝期以後増加してくる過程であると思われる。

そこで博士弟子の定員に目を転じてみると、当初五十人であったものが、昭帝期には百人、宣帝末には二百人と次第に増加し、元帝期以後は、元帝のはじめに一時定員枠を取り除いたり、成帝の末に一時三千人になったりするものの、前漢末まで定員はほぼ千人前後であった（『漢書』儒林伝）。このうち元帝期以前の昭帝期と宣帝期の定員増の事情

を考えてみると、前稿で推測したように定員分の博士弟子については太常が当時管轄していた五つの陵県から十人づつ選んでいたとすれば、その後の定員増の数字がうまく説明できないが、当初の定員分の博士弟子は太常選のみであったものが、昭帝期や宣帝期の増加の過程で、定員外であった郡国選の博士弟子も定員分に繰り込まれてきたものとすれば説明できる。つまり地方社会において「知識人」が次第に増加してくるにつれて、最初ごくわずかであった郡国選の博士弟子も、次第に定員外に置くことができないほど増加してきたものと解せるのである。<sup>23</sup>このように解釈すれば、博士弟子制度創始の目的が順調に達成され射策科の主体が移行するものの、郎官への登用が行われることによって射策科が純然たる登用法として機能し、また「知識人」も郡国の属吏のみならず博士弟子として太学にも吸収され、博士弟子制度そのものも十分に機能していたことになる。

しかし次の元帝期における千人という博士弟子定員の急増は、博士弟子制度自体に重大な変化をもたらすことになる。いま『漢書』儒林伝によって定員が千人になるまでの経過を見ると、

元帝儒を好み、能く一經に通ずる者は、皆復す。数年にして、用度の足らざるを以て、更めて為に員千人を設くとなつてゐる。これらの時期を『漢書』卷九元帝紀によってあと付けると、初元五年（前四四）四月の詔の中に「博士弟子、員を置く勿く、以て学ぶ者を広めん」とあるのが、儒林伝の「能通一芸者、皆復」にあたり、永光三年（前四二）の条に「冬、塩鉄官・博士弟子の員を復す。用度足らず、民多く復除し、以て中外の繇役に給すること無きを以てなり」とあるのが、儒林伝の「以用度不足、更為設員千人」にあたることは間違いない。そこでこれらの史料を照合して、元帝期に博士弟子の定員が千人になるまでの事情を考えてみると、儒学を好んだ元帝は「知識人」を増やそうと考え、初元五年に博士弟子の定員枠を取り除き、一經に通じた者は全て博士弟子として徭役を免除した。そうすると、大勢の者が博士弟子となり、徭役を負担する者が足りなくなってしまう、三年後の永光三年に改めて定員制を復活し、その数は千人にしたというのである。そして以上の事情からは、次のようなことが推測できよう。

元帝が即位した当初の博士弟子には定員が決まっており、それは宣帝末の定員の二百人前後と思われる、その時は太常と郡国の守相がそれぞれ規定に従って博士弟子を選んでゐた。ところが、初元五年に定員枠が取り除かれると、博士弟子になる者が徭役負担に支障をきたすほどに増加し、それだけの数の博士弟子を太常や郡国の守相が選ぶことはほとんど不可能になった。そこで、定員枠がはずされた時の博士弟子の中には、自薦の者が相当いたものと考えられる。

そして永光三年に定員制が復活されると、その数は千人という大量なものであり、やはりそれだけの数の博士弟子を太常と郡国の守相のみで選ぶということはむづかしく、定員制復活以後の博士弟子の中にも太常選や郡国選の者に加えて、自薦の博士弟子もかなり含まれていたと考えられる。このように考えると、「西のかた京師にいたり、經を受けんと欲して」博士弟子となった翟方進のような、自薦によって博士弟子となった者の存在も説明できるのである。

また翟方進が博士弟子となった年齢は「規定」の十八才以上ではなく、それより若かった。そこで定員枠を取り除いた時の事情を見ると一經に通ずることのみが条件とされており、一經に通じていれば年齢は問題にされなかったものと思われる。そして定員制が復活されてからも年齢は十八歳以下でも問題にされなかったと考えれば、翟方進の場合を説明でき、さらに後漢時代にも十八歳以下で太学に入学者の例があるのも説明できるのである。このことは、太学で勉強しようと思えば、ほぼ誰でも博士弟子となることができたことを意味するであらう。すなわち、ここに至って「規定」の博士弟子の採用基準を示したBの(a)(b)部分は、もはや空文となつてしまつたのである。<sup>(24)</sup>

以上、二節にわたって検討してきた結果、当初の「規定」は元帝期に至つてほぼ完全に変質してしまつたと見てよい。しかし、これのみによって博士弟子制度が崩壊してしまふのではない。射策科の主体が甲科に移行し郎官を輩出する体制になつたのであるから、この体制が整つておれば、儒学が根本的な政治理念として定着した後漢においても、なお官吏養成制度として博士弟子制度は機能し続けたはずである。ところが、元帝期における博士弟子の定員の増加がこの体制を崩し、結果的に博士弟子制度を崩壊へと導いていくことになる。そこで節を改めて、これを検討してみ

よう。

### 三 博士弟子制度の崩壊

#### (一) 射策科の崩壊

さて、博士弟子制度は官吏養成制度であり、博士弟子を官吏として恒常的に輩出していくことを目的としたから、本来射策科が存在しなければその機能を果たし得なかったはずである。そこで博士弟子制度創始当初に、どのポストに何人が配当されたかを見ると、それは全くわからない。しかし「規定」では射策の結果「不能通一芸」と判定されないかぎり何らかのポストを得ることになっており、また当初の定員が五十人と少なく、これに定員以外の郡国選の者を加えても昭帝期の百人にはならなかったものと考えられることから、文学掌故の任用に重点が置かれていた当時であつては、射策科に合格した者はほぼ全員が文学掌故に任用されたものと考えられる。そしてこれ以降、前漢時代に射策科によって任用される者の数を示すものは、前に掲げた『漢書』儒林伝にある平帝期のものしかない。それによると、この時期に毎年の射策によって何らかのポストに任用される者は、甲科（『郎中』が四十人、乙科（『太子舍人』が二十人、丙科（『文学掌故』が四十人であり、合計すると百人となる。これ以前はもう少し少なかったと思われるが、武帝期に用意されていたポストが五十前後であつたとすれば、昭帝期から哀帝期までの間に博士弟子に用意されていたポストは、五十から百の間であつたと見てよいであろう。これをもとに考えると、昭帝期や宣帝期の定員増によつて不合格となるものは、昭帝期で数十人であり宣帝期でも百人余りと考えられ、前に見たように必ずしも全員が毎年の射策を受けるとは限らなかったことから、この時期にはやや狭き門とはなるが射策科は十分に機能し、むしろ地方社会における「知識人」の増大によつて、射策科は主体が甲科に移り純然たる登用法として機能するようになる。

ったと考えられる。

ところが元帝期に定員が急増し、これ以後の博士弟子が千人前後となると事態は大きく変わる。仮に当時用意されていたポストが百であったとしても、毎年の射策合格者は全体の一割ということになり、残りの九百人の博士弟子たちは不合格となる者も含めて射策科の対象外となる。これでは博士弟子定員に対する任用ポストが甚だ少ないといわなければならない、さらに丙科によって文学掌故に任用されると昇進の見込がなかったとすれば、昇進の望みがあるのは甲科の郎官と乙科の太子舍人（二百石）のみであり、その数は六十人にすぎなくなる。つまり、元帝期以後博士弟子定員に対する任用ポストの過少の状況が顕著になり、彼らのほとんどは射策科によって昇進の機会を得ることができなくなったことを物語るのである。その意味では、このような状況下において射策科によってポストを得た元帝期の翟方進・王嘉、成帝期の馬宮・房鳳は、博士弟子の中でも特に優秀な者であったということができであろう。

このように元帝期以後の定員急増によって、たとえ博士弟子となっても大半の者が射策科による任用の対象外とならざるを得なくなれば、彼らは射策科以外の他の登用法によって昇進の機会をみつけないならなくなる。そこで以前にも増して長期間太学に在学し、上書や辟召により昇進の機会をつかもうとしたり、途中で退学し地元に戻り郡県吏となつて昇進しようとする者が多くなろう。そして後漢の例から考えると、特に退学して地元の郡県吏となる者が増加したと思われる。<sup>25</sup>このような事態に至ったことは、射策受験が必ずしも博士弟子の最終目標でなくなり、射策科の博士弟子制度に占める比重が低下したことを意味する。そして前漢末まで千人前後の博士弟子がいたにもかかわらず、史料で確認できる最後の射策受験者の馬宮・房鳳が、遅く見ても成帝期中頃の博士弟子であったことから<sup>26</sup>、射策科の比重の低下は元帝期以後次第に顕著になり、成帝期の後半になると登用法として機能しなくなったと考えられる。すなわち、登用科目の一種として定着したかに見えた射策科が、博士弟子定員に対する任用ポストの過少という事態によって、元帝期以後次第にその登用法としての存在意義を失い、ついに前漢末にはほぼその機能を

停止し、後漢時代に入っても細々とは続けられるものの、史料に残るほどの者を射策科によって輩出できなくなると考えられるのである。そしてこれは、射策科と一体となることによって官吏養成制度として機能した博士弟子制度自体が、十分に機能し得なくなったことを物語る。

## (二) 太学の変質

さて、博士弟子制度が官吏養成制度としての機能を十分に果たし得なくなった時、それを遂行していくための機関として設置された太学の機能も変質していく。例えば元帝期に博士弟子となった翟方進の場合、十余年の太学在学中に経学に明習するようになった結果「徒衆日々広がり、諸儒これを称す」とあるように、彼につき従う者が増え儒者たちから称賛された。また成帝の末に博士弟子となった息夫躬も、太学在学中に同郡出身で哀帝の皇后の父である傅晏と交友関係を持ち、「躬これ繇り以て援と為し、交游日々広がる」とあるように、傅晏をうしろだてとして太学内外で交友関係を広げていった。これは、当時太学が交際の場合となり、いわば人脈形成の拠点となったことを物語る。そして彼らがいずれも太学在学期間が相当長かったことから考えると、太学が交友関係・人脈形成の場となる契機は、在学年限が一年に限られなくなったことにあると考えられる。何故なら、このような例は時期的にもう少し早くから見られ、宣帝期の匡衡が太常掌故から平原文学に補された時、学者たちが匡衡は経学に明るく後進たちが彼を慕っているので平原という遠方の属吏にすべきでないと上書したことは、匡衡が太学在学中に交友関係を広げ、また彼につき従う者が多かったことを推測させるからである。とすれば、博士弟子の太学在学期間の長期化が交友関係の拡大をもたらし、特に元帝期以後の定員急増による任用ポストの過少という事態によって、博士弟子の大多数が射策科以外の登用経路によらなければならなくなった時、その傾向にさらに拍車がかかると考えられる。それは、数少ない昇進の機会に与るためには、何よりも交友関係や人脈が必要であったと考えられるからである。そしてこの傾向が強ま

れば、官僚を核とした一種の政治集団の如きものを作り出すことになる。それが鮑宣の場合である。『漢書』卷七十二本伝によると、平帝期末に鮑宣が大不敬によって死刑に処されようとした時に、王威をはじめとして千人以上の博士弟子たちが集まって鮑宣の助命を願ったという。<sup>(28)</sup>これは当時鮑宣の周囲に博士弟子たちが一つの政治集団を形成していたことを如実に物語る。すなわち、前漢末には博士弟子定員の増加によって射策科が登用科目の一種としての存在意義を失ってくるとともに、太学もまたそれ本来の官吏養成機関としての機能を失い、人脈形成の場となっていくのである。

ところで、機能が変質した前漢末における太学の姿は、後漢後期の桓帝期頃の太学の姿と同様のものを感じさせる。桓帝期には太学生（博士弟子）は前漢末よりさらに増え三万人にのぼったが、当時の太学の実態たるや、互いに政治論議に力を入れ交友関係を広める場となり、そこで学問に励もうとする者は排除されかねない状況で、もはや本来の教育の場でなくなっていたことは、『後漢書』伝六六循吏伝中の仇覽伝などからうかがえる。<sup>(29)</sup>そして延熹九年（一六六）と建寧二年（一六九）の二度にわたる党錮事件の頃には、郭泰・賈彪を筆頭とする太学生たちが李膺・陳蕃・王暢などの官僚と手を結んで、清流派の一翼を担う政治集団を形成していたことは周知のところである。<sup>(30)</sup>確かに、後漢の太学がこのように変質してくる背景には、当時の外戚と宦官による政權争いや不正な官吏登用などによって政治が腐敗していた状況下で、太学生が批判の矛先をそれへと向けざるを得なかったという実情もあった。しかし、前漢末に同様の傾向が見られ、それが博士弟子定員に対する任用ポストの過少によってもたらされたとすれば、後漢の太学の変質もこの延長線上にあると考えることもできるであろう。そこで、後漢の太学の変遷についてはすでに吉川忠夫氏の優れた研究があるが、改めて右のような方向でそれを検討してみよう。

『後漢書』伝六九儒林伝上によると、後漢の太学は光武帝の建武五年（二九）に建立され、次の明帝期には匈奴王がその子弟を太学に遣わすほど充実し「濟濟たるかな、洋洋たるかな、永平より盛んなり」といわれたが、明帝より

三代後の安帝期に至ると太学は荒廢し、「博士、席に倚りて講ぜず、朋徒、相視て怠散す」という状態になってしまふ。この原因について吉川氏は、当時次第に盛んになりつつあった古文学を排除し旧来からの今文学のみが太学で教授されたことによって、学問の創造性が失われたことにあるという。確かにそれも重要な一因であろうが、しかし根本問題として、前漢元帝期から続く射策科による任用ポストの過少という問題があったのではないだろうか。後漢に射策科による任用ポストがどれほどあったかはわからないが、順帝の陽嘉元年（一二三）に太学が復興され再出発しようという時に、射策科による任用ポスト枠を甲科・乙科それぞれ十人しか増やさなかったことから考えると、それはさほど多くなく平帝期の数からそれほどかけ離れたものではなかったであろう。とすれば、太学生数の増加は任用ポスト過少の状況をますます厳しいものにしていくことになり、それに加えて古文学が排除され、さらに和帝期に徐防の上疏によって今文学の中でも家法遵守がモットーとされるようになれば、太学で学ぶ意義が薄れ仕官希望者は当時地方に多く存在した私塾に流れ、そこで知識を身に付けて昇進の機会を与ろうとし、その結果、太学の荒廢という事態を招くことになると思われるのである。ここにおいて、当初の博士弟子制度はほぼ完全に崩壊してしまったといつてよいであろう。

その後、順帝期に太学が復興されると桓帝期には太学生数は三万人に達する。その増加のきつかけが何であったのか史料からは必ずしも明確にできないが、<sup>33</sup>仇覽に太学遊学を勧めた考城県令の王渙がいみじくも「今日の太学、長裾を曳ぎ、名誉を飛ばす」といったように、当時の太学はもはや学問の場としての雰囲気はなく、完全に人脈形成の場となっており、そこには射策科の必要性はなくなっていた。これを象徴するかのように桓帝期に、これまで細々ながら続いていた射策科にも、信じられないような制度の変更が加えられる。それは、まず太学生で二年間で二経に通じた者を文学掌故に補し、彼らのうちその後二年間で三経に通じた者の中の高第者を太子舍人に取り立て、さらにその中で二年で四経に通じた者のうち高第者を郎中とし、またさらに郎中となった者のうち二年で五経に通じた者の中



の高第者にその才能に応じた官を与え、各段階で不合格となった者は同じ段階の試験を再び受けなければならないという、甚だ繁雜なものであった。<sup>(35)</sup> このように文学掌故を出発点として二年ごとに段階的に試験を受けなければならなくなつたことは、それまでの射策科が一回の射策によつてそれぞれの成績に応じて適當なポストを与えていたのに比べれば、制度的にははるかに後退しており、最初の文学掌故となるまでに二年かかり、郎官より上位の官に就こうとすれば最低八年を要するという射策科を、一体誰が受けようとするのか。これは射策科の形骸化以外の何ものでもなく、ここに至つて射策科の命脈は完全に絶たれたといつても過言ではないであろう。そして完全に人脈形成の場となつた太学は、前に見たように、外戚・宦官による政治腐敗を批判する政治集団Ⅱ清流派の一拠点となる。しかしそれも長くは続かず、そこには第二次党錮による太学生への徹底的な弾圧が待つていた。これによつて大打撃を受けた太学は、これ以後もなお存在するものの人脈形成の場としての機能も失い、ついにそこに残つた太学生たちには何ら昇進の機会が保障されなくなり「結童にして学に入り、白首にして空しく帰る」<sup>(36)</sup>状態になる。これが、博士弟子制度を遂行していくために設置された漢代太学の終焉の姿であつた。<sup>(37)</sup>

以上より見れば、元帝期以後、儒学が根本的な政治理念となつていく趨勢の中で、太学の充実をはかるために定員を増加したことが、それに見合うだけのポストを射策科に用意しなかつたために、かえつて太学の官吏養成機関としての性格を変質させ、結果的に博士弟子制度を崩壊へと導くことになつたのである。

### お　わ　り　に――射策科から孝廉科へ――

本稿で検討したところに基づいて漢代博士弟子制度の展開過程を整理すると、次のようになる。まず、武帝期に公孫弘の上奏に基づいて創始された博士弟子制度は宣帝期までは順調に行われ、その過程で究極的な目的であつた地方社会における「知識人」の養成が着実に達成されてくるとともに、この制度が官吏養成制度として機能する時の重要

な部分である射策科が純然たる登用法として定着する。ところが元帝期に至ると、それまで順調に行われていた博士弟子制度にかげりが見えてくる。それは、儒学に傾倒する元帝が博士弟子の定員を一気に増やしたにもかかわらず、その数に見合うだけの官吏のポストを射策科に用意しなかったためである。この状況は以後も改められることなかったことによって、射策科と結び付いた官吏養成制度としての博士弟子制度は、前漢末においてほぼその機能を停止し、後漢安帝期の太学の荒廢によって完全に崩壊する。一方、博士弟子制度を遂行するために設置された太学は、元帝期以後のこのような状況のもとで本来の機能を果たさなくなり、以前から少しづつ芽生えつつあった昇進の機会をつかむための人脈形成の場としての性格を強めていき、後漢順帝期の太学復興後、一六九年の第二次党錮事件による弾圧まで政治集団形成の場となった。

さて、以上のようにまとめることができるのであれば、本来儒学を全国に普及するために創始された博士弟子制度は、このように儒学が根本的な政治理念となりつつあった前漢末から後漢かけての間に変質し崩壊をむかえたことになり、これは一見すると矛盾するようにも思われる。もちろんそこには、博士弟子定員に対する任用ポストの過少という儒学の普及の問題とは次元を異にする要因があったが、当初の博士弟子制度創始の目的を考える時、この時期に崩壊へと向かいはじめるのは、あながち任用ポストの問題だけではないと考えられる。そこで最後に、博士弟子制度創始の意義について検討してみよう。

博士弟子制度の究極的な目的が達成された時、郡県府においては、もはや中央政府から派遣されてくる属吏を必要としないほど、多くの地元出身の「知識人」が属吏として採用されることになる。そして彼らの多くは一生郡県の属吏のままで終わるのではなく、何らかの登用法によって二百石以上の官僚に就官した。それは明経なることによって郡県の属吏となった「知識人」の全てが就官していることに表われており、中でも彼らの半数がそれによって就官している孝廉科は、地方社会で養成された「知識人」を官僚機構に供給する主要な登用法となった。何故なら孝廉科は、

郡国から毎年一定数の人材を察挙することから、地方社会と最も密着した登用法だったのである。とすれば、博士弟子制度の成功によって地方社会に大量に輩出された「知識人」は、恒常的に孝廉に察挙するための人的基盤となったといえよう。このことは、孝廉察挙が開始された当初の事情を見れば明らかとなるだろう。

後漢時代に主流の登用法となる孝廉科は、博士弟子制度が創始される十年前の元光元年（前一三四）にその察挙が開始されたが、周知のように当初は必ずしも順調に行われなかった。それは、当時郡国の中には一人の孝廉をも察挙しないところがあり、この状況を慮った武帝が元朔元年（前一二八）に九卿・博士などに命じ、孝廉を察挙しない郡国の守相に対する罰則規定を作らせていることから知ることができる（『漢書』卷六武帝紀）。これによると、孝廉科がはじめ軌道に乗らなかったのは、郡国の守相による孝廉察挙の怠慢が原因であったことになるが、しかしその背景には、さらに根本的な問題が潜んでいたと思われる。それは、孝廉を察挙するための人材的基盤の欠如である。そしてその人材とは、前漢時代に孝廉に察挙されたほとんどの者が先の明経も含めて經学を身に付けていたことから、<sup>(39)</sup>「知識人」が主要なものであった。とすれば、公孫弘が「規定」のⅡ部分で指摘するような、属吏の多くが無能で地方統治がうまくいっていない状況下では、孝廉が察挙できる人材はほとんどいなかったことになり、特に孝廉を察挙しない郡国の守相に対する罰則規定が制定された元朔元年以後には、たとえ孝廉を察挙してもそれが不適当な人物であったならば郡国の守相は選挙不実として罰せられたことから、孝廉科はますます沈滞していったと考えられる。すなわち、孝廉科は博士弟子制度の創始による「知識人」の輩出を待たなければ軌道に乗り得ないことになり、本来は博士弟子制度が孝廉科に先んじて、あるいはそれと同時に創始されるべきであったと考えられるのである。このような考え方は、太学の設置と古の貢士制度に基づいた新たな登用法の必要性を主張した董仲舒のいわゆる第二対策に見える。

そこではまず、武帝が日夜政治に力を入れて賢者を求めようとしているのに未だに賢者を得られないのは、平素か

ら人材養成に励まないからだとして、人材養成の根源は太学であるから太学を設置して「天下の士」を養成すべきだと説く。次いで、地方統治がうまくいかず属吏たちが教化に努めず法律を無視して人々を虐待するのは、全て地方長官の無能により、それは地方長官が必ずしも実力によらず家柄や財産だけによって官僚となり、そこからただ日を重ねるだけで今の地位を得ていることから起こるものだとする。そこで、列侯・郡守・二千石の高級官僚に管轄下の吏民の中から毎年賢者二人を察挙させ、あわせて被察挙者の才能いかにによって察挙した官僚に賞罰を与えるようにすれば、官僚たちは賢者を求めるようになり「天下の士」を官僚として採用できるし、また実力によって昇進させれば賢者とそうでない者は自然に弁別されると述べている。<sup>(4)</sup>

この中で注目すべきは「天下の士」が二個所に見えることであり、この両者は同一のものと見て間違いないだろう。つまり太学で養成された「天下の士」が、高級官僚たちによって察挙されて官僚になると考えられているのである。とすれば、董仲舒の対策の中では、太学の設置と新たな登用法の施行は一連のものとしてとらえられていることになる。これが後の博士弟子制度と孝廉科の思想的根拠となったことは間違いなく、また現実問題としても「規定」に見えるように、孝廉察挙の有力な対象となる現任属吏層の無能の状況下にあつては、博士弟子制度が創始されなければ孝廉科は軌道に乗り得なかつたのである。それでは何故、孝廉科が先に開始されたのであろうか。その事情については明らかではないが、以上のことから博士弟子制度創始の意義については、次のようにいえるであろう。

本来一連の制度として始められるべきであつた孝廉科が先に施行され、しかもそれが順調に行われていない現状のもとで創始された博士弟子制度は、官吏養成制度として機能するために博士弟子を官僚機構に送り出すべき登用法を必要としたが、その時沈滞していた孝廉科とは直ちに結び付かず、新たに射策科が設けられた。そして射策科に負わされた任務は、属吏層の無能という事態の早急な打開のための属吏予備軍である文学掌故の輩出であつた。しかし仕官希望者に向学心を持たせるために射策科に郎官やそれ以上の官への就官の可能性も盛り込み、また文学掌故も郡国

をはじめとする諸官庁が属吏としてフルに活用した結果、博士弟子制度は軌道に乗り、究極的な目的であった地方社会における「知識人」養成が達成された。これによって孝廉科もようやく順調に行われるようになり、昭帝期以後徐々に孝廉に察挙されて就官する者が輩出されてくるようになる。<sup>(4)</sup>すなわち、孝廉科が先に施行されたことによって、博士弟子制度は孝廉科を軌道に乗せるための制度となったのである。

ところが、次第に順調に行われるようになってきた孝廉科も、前漢時代には丞相などトップクラスの官僚を輩出する登用法とはなり得ず、射策科がその主要な登用法の一つとなっていた。これは永田英正氏がすでに指摘しており、さらに氏は後漢時代に孝廉科が主流の登用法となったことについて、儒学の普及によってそれを単に学問・教養として学ぶだけでなく、そこに規定された礼を実践することが士風となったからであるとする。<sup>(5)</sup>確かにそこに、孝廉科が登用法として擡頭してくる要因があったであろう。しかし、前漢時代にトップクラスの官僚を輩出していた射策科が、後漢時代になると何故官僚を輩出できなくなるのかについては、十分な答えとはならないであろう。つまり、たとえ右のように後漢時代の士風が儒学を学問・教養として学ぶだけのものではなくなっていたとしても、儒学を身に付けることを本分としていた射策科が正常に機能していたならば、後漢においてもトップクラスとまではいかないまでも少なからず官僚を輩出していたはずである。ところがそうはならなかった。その理由は、本稿で考察したように、射策科が元帝期以後の博士弟子定員に対する任用ポストの過少という事態によって、登用法としての存在意義を次第に失っていったことであった。ここに、前漢時代の射策科から後漢時代の孝廉科へと、登用法の主流が自然に移行することになる。何故なら、射策科と孝廉科はともに毎年一定数の人材を官僚機構に送り込むという点で登用法として共通の性格を持ち、さらに察挙対象がともに「知識人」であったから、一方が衰退していく時、他方がそれに取って代ることは容易であったと考えられる。すなわち、博士弟子制度が成功したことによって地方社会に察挙対象となる「知識人」を豊富に抱えるようになった孝廉科は、それまで高級官僚への主要なコースとなっていた射策科が存在意義を

失った時、登用法としての不動の地位を獲得したのである。換言すれば、射策科が登用法として機能しなくなった時すでに、博士弟子制度という国家レベルでの官吏養成制度を必要としないほど、地方社会において恒常的に官僚を輩出できるだけの人的基盤ができていたのである。

このような状況になった時、「知識人」は登用法によって官僚機構に恒常的に供給されてそこでの大勢を占めるようになり、儒学が政治の根本理念となっていく。この契機となるのが元帝期である。<sup>43</sup>恐らく元帝が儒学に傾倒し博士弟子の定員を急増させたのも、このような背景によるのであろう。そして定員急増によって大多数の博士弟子が射策科以外の登用法によらなければ昇進できなくなった時、新たな登用経路として擡頭してくるのが公府による辟召であらう。ほぼ時を同じくして、太学が人脈形成の場としての性格を強め、また辟召制に「辟」が現われ公府による辟召が準登用法としての性格を強めてくることが、それを物語る。このような見通しが正しいとすれば、博士弟子制度が登用法体系あるいは政治の動向に与えた影響は大変大きかったといわなければならない。特に博士弟子制度が登用法体系の運営を軌道に乗せるための人的基盤を形成したとするならば、漢代登用法を研究するにあたって、従来この制度を必ずしも積極的に取り上げなかったことは反省されなければならないであらう。<sup>44</sup>

# 註

- (1) 儒学の解釈については、富谷至『儒教の国教化』と『儒学の官学化』(『東洋史研究』三七—四、一九七九年)を参照。

- (2) 拙稿「漢代博士弟子制度について——公孫弘の上奏文解釈を中心として——」(『鷹陵史学』一六、一九九〇年)。なお、本稿において前稿とするのは、全てこの拙稿を指す。

- (3) 『杏林大学医学部教養課程研究報告』四、一九七七年。
- (4) 平井氏との根本的な視点の相違は、すでに前稿によって明らかであらう。そこで本稿では、氏の説に対する個々の反論は避けることにしたい。

- (5) 『後漢書』列伝では確認できないが、後漢時代に射策科によって官僚となった者の例が一例ある。それは、惠棟が『後漢書補注』で引く陳羣の『汝穎士論』に「汝南袁公著為甲科郎中」とある袁公著である。「甲科郎中」とある

から、彼は恐らく射策科によって官僚となったのであろう（前稿、註⑨参照）が、正史にその経歴をとどめないことからすれば、これは後漢時代に射策科が登用法体系の中で占める地位がいかに低かったかを物語る例となろう。

- (6) 東晋次氏が「漢代の諸生」（『愛媛大学教育学部紀要（第Ⅱ部、人文・社会科学）』一六、一九八四年）の註④（二頁）で、博士弟子制度に関する疑問点として指摘していることが、本稿を執筆するにあたって参考となった。その意味で本稿は、氏の指摘した疑問点の解決を試みるものともなっている。

- (7) 前稿と同様に、校定に際しては『史記』の記載を基本とし、欄外に（ ）を付した文字は『漢書』に記す文字であり、同じく「」を付した文字は『史記』記載の文字で『漢書』に記す文字をとったことを意味する。また、文の切り方や文に付した記号も全て前稿と同一である。

- (8) なお、一覧表中の召信臣は「明経甲科」とあり射策の語はないが、彼も射策科によって官吏となったと考えられる。その理由については、前稿六四頁の註⑩を参照していただきたい。

- (9) 前漢時代にどのような登用法によって就官しているかについて詳しくは、拙稿「漢代辟召制の確立」（『鷹陵史学』一五、一九八九年）六三頁の註⑤に掲げた一覧表を参照していただきたい。

その一覧表の登用科目のうち「博士弟子」としたのが本

稿の射策科にあたるが、そこで成帝期に射策科によって官吏のポストに就いた者を四名としたのは誤りであり、正確には本稿のように元帝期二名、成帝期二名としなければならない。ここに訂正する。

- (10) 登用法と辟召制の性格の相違については、同右拙稿を参照。

- (11) このような実例からすると、「規定」で博士弟子が任用される掌故としては「文学掌故」のみになっているが、実際には彼らは太常に属するさまざまな掌故に任用されていたことがわかる。つまり「規定」Bの(c)で特に文学掌故のみが記されているのは、それが博士弟子の主に任用される掌故であったことを示すのではないだろうか。

- (12) 後漢時代の射策科に任用規定にも文学掌故への任用を規定したものがあつた。それは後掲註(35)に掲げた桓帝期の任用であり、また『後漢書』紀八靈帝紀の熹平五年（一七六）一二月の任用規定では、文学掌故ではなく直接郡国文学史という地方の属吏へ任用することになっている。しかし前者は後述（二四、二五頁）のように射策科の形骸化を象徴する任用規定であり、後者もまたそれ以後の規定であるから、射策科が形骸化する以前に後漢で文学掌故への任用規定があつたかどうか疑わしい。例えば、和帝期に射策規定の改正を主張した徐防の上疏には「甲乙之科」（『後漢書』徐防伝）とあり、また順帝期に太学復興を機に射策科の任用枠を広げた記事にも「増甲乙科員各十人」（『後漢

書（順帝紀）とあるのみで、そこには文学掌故への任用を意味する丙科がない。ここから、文学掌故への任用が意味を持たなくなった後漢時代には、恐らくそれへの任用は規定から削除されたものと思われる。

- (13) 「規定」ⅡのC部分の「若不足」以下の文がこれに該当する。それによると、掌故は「中二千石属」つまり九卿層の属吏となり、文学掌故は「郡属」つまり郡国の属吏となることになっていた。そして「規定」は博士弟子制度に関するものであるから、この掌故・文学掌故はいずれも博士弟子出身の掌故を指すものと思われる。

- (14) これについては、浜口重国「漢代に於ける地方官の任用と本籍地との関係」、『秦漢隋唐史の研究』下巻第五所収、東京大学出版会、一九六六年）を参照。

- (15) 疑奏になすべを知らなかった廷尉府の掾史たちのために、彼らに代って奏文を書き彼らに感服させた児寛の例が傍証となろう。

- (16) 江幡真一郎氏は「西漢の官僚階級」、『東洋史研究』一一五・六、一九五二年）で、史料に射策科によって官僚となった者が少なく、特に乙科・丙科の出身者がほとんどいない理由について、明経によって郡文学となった者が多いことに注目し、彼らの中に乙科・丙科の出身者が含まれており、甲科ほど名譽なことではなかったから列伝にはそのことを記さなかったのだとする（一七頁）。江幡氏が挙げた郡文学となった者の中で、梅福・張禹については「学長

安」「至長安学」とあり恐らく太学で学んだと思われるが、その他の者は地元で養成された「知識人」であったと考えるほうが妥当であろう。乙科の太子舍人が史料に見られないことについては何ともいえないが、丙科にあたる文学掌故については、本稿のような方向で考えたと理解できるのではないだろうか。なお、梅福・張禹のような例の解釈については後述する（一六頁）。

- (17) 前稿、五二～五三頁参照。彼らに関する史料は次の通りである。

終軍——年十八選為博士弟子。（中略）至長安上書言事。武帝異其文、拜軍為謁者給事中。（『漢書』卷六四下）

息夫躬——少為博士弟子、受春秋、通覽記書、容貌壯麗、為衆所異。哀帝初即位、皇后父特進孔鄉侯傳娶与躬同郡、相友善、躬繇是以為援、交游日広。先是、長安孫寵亦以游說顯名、免汝南太守、与躬相結、俱上書、召待詔。（中略）上擢寵為南陽太守、〔右師〕譚頌川都尉、〔宏〕弘・躬皆光祿大夫左曹給事中。（同右卷四五）

伏湛——成帝時、以父任為博士弟子。五遷、至王莽時為繡衣執法。（『後漢書』伝一六）

- (18) 彼らは次に引く史料の傍点を付した部分から太学に在学したと思われる。



馮野王——受業博士、通詩。少以父任為太子庶子。『漢書』卷七九

張禹——及禹壯、至長安學、從沛郡施讎、受易、琅邪王陽・膠東唐生問論語、既皆明習、有徒衆、拳為郡文學。〔同右卷八一〕

梅福——少學長安、明尚書・穀梁春秋、為郡文學、補南昌都尉。〔同右卷六七〕

(19) 前掲註(6)の東論文の註60で氏は、

③在学年数について、前漢から後漢にかけては一年、桓帝期以降は最低二年と考えられるが、これ以上在学したと思われる例(例えば『後漢書』列伝26賈逵伝)もあり、明確な在学年数規定が存したのかどうか。これについては推測であるが、十八歳以前に入學した者は、博士弟子の最低卒業年齢たる十九歳までは在学可能であったと考えられないか。

④太学卒業後中都官に補任されずに故郷に帰った者も多い(仇覽、申屠蟠、鄭玄など)。彼らはすべて歳試にパスしなかったからであろうか。しかしながら、仇覽などの人々が歳試にパスしなかったとは考えにくく、とすると彼らは中途で退学したか、又或いは自主的に歳試を受けなかったとも推測される。公孫弘功令の「一歳皆輟課」の規定は前漢はともかく後漢においては厳密に適用されず、太学卒業後受験希望者のみを対象に歳試が実施されたと考えることも可能ではなからうか。

と述べる。

(20) 「漢代の帝陵」『秦漢政治制度の研究』第三篇第六章、

日本學術振興會、一九六二年) 五三二—五三四頁。

(21) 兩漢を通じて太常から孝廉に察舉された例は、前稿六三頁の註②で取り上げた馮譚・馮遂兄弟(いずれも『漢書』卷七九馮奉世伝)の例しもなく、彼らは前後の記事から考えると、宣帝末から元帝期の間に察舉されたと思われる。

(22) 『漢書』卷九九王莽伝中、始建国元年(九)正月の官名改称の記事に、

更名秩百石曰庶士、三百石曰下士、四百石曰中士、五百石曰命士、六百石曰元士、千石曰下大夫、比二千石曰中大夫、二千石曰上大夫、中二千石曰卿。

とあり、元士は六百石の官僚のみを指すが、この場合、東氏が指摘するように六百石以上の官僚の子弟を指すと考えてよいであろう(前掲註(6)の東論文、八頁)。

(23) 昭帝期に百人の博士弟子を全て太常が選んだとすれば、この時期に太常が管轄していた陵県は武帝期の五つに昭帝の平陵を加えた六つであるから、各陵県から十人づつの選んだとして六十人にしかならない。さらに、宣帝末に定員が二百人に増加した時、陵県は宣帝の杜陵を含めた七つであったから、太常がここから全ての博士弟子を選んだとすれば、十人づつであれば七十人であり、また儒林伝の「宣帝末増してこれに倍す」という表現を生かして、各陵県か

ら倍の二十人づつ選ぶとしても百四十人にしかならない。そこで本稿のように考えれば解釈できるのである。

なお、平井正士氏も「公孫弘上奏の功令について」（『杏林大学医学部進学課程研究報告』一、一九七四年）で、定員が増加してくる過程で郡国選の博士弟子が定員分に繰り込まれたと考え、「恐らく太常直選の定員は五十人としておいて、増加分は郡国選を加えて定員化したのではないかと想像する」と述べる（七五頁）。

(24) 前掲註(6)の東論文の註6で氏は、

①太常直選の博士弟子の年令は十八歳以上であったが、それ以前に入学した例もあり、郡国選や六百石以上の官吏の子弟の入学の場合、年令は問われなかったのかどうか。

と述べる。さらに氏は後漢時代に太学生が三万人に至った要因を六百石以上の官僚の子弟が新たに加わったことに求めるが（八頁）、むしろ本稿のように自薦の者が増えたと考えたい。

(25) 『後漢書』列伝を見ると、太学に在学したと思われる者の多くが出身地に帰り、そこで郡県吏となったり、あるいは地元で孝廉に察挙されている。

また仇覽のように郡県吏から太学に入学者もおり、この例は前漢時代にも見られ、元帝期の翟方進が最初である。当初の博士弟子制度が属吏層の改革を目指したものであったとすれば、博士弟子に郡県吏出身者が採用されるよ

うになったことは、博士弟子制度あるいは太学の変質を物語ると思われる。この点については本稿で言及できなかった、今後の課題としたい。

(26) 馬宮は『漢書』卷一九百官公卿表下によると、哀帝の元寿元年（前二）に光禄勳になっている。射策甲科によって郎官となつてから光禄勳に至るまでの間に七つの官を歴任していることから、射策を受験したのは恐らく陽朔（鴻嘉年間（前二四～前一七））だと思われる。

房鳳は太常から察挙された後一度官を失い、その後大司馬票騎將軍王根の長史に補されている。百官公卿表下によると、王根が大司馬票騎將軍の地位にあったのは元延元年（前一二）から綏和元年（前八）の間であり、彼もまた馬宮と同じ頃に射策を受けたと思われる。

(27) 前掲註(5)参照。

(28) 丞相孔光四時行園陵、官属以令行馳道中、宣出逢之、使吏鉤止丞相掾史、没入其車馬、摧辱宰相。事下御史、中丞侍御史至司隸官、欲補從事、閉門不肯内。宣坐距閉使者、亡人臣礼、大不敬、不道、下廷尉獄。博士弟子濟南王威拳幡太学下曰、欲殺鮑司隸者会此下。諸生会者千餘人。朝日、遮丞相孔光自言、丞相車不得行、又守闕上書。上遂抵宣罪滅一等、髡鉗。

(29) 例えば『後漢書』仇覽伝に、

覽入太学、時諸生同郡符融有高名、与覽比字、賓客盈室。覽常自守、不与融言。融觀其容止、心独奇之、乃謂

曰、与先生同郡婁、隣房隣。今京師英雄四集、志士交結之秋、雖務經学、守之何固。覽乃正色曰、天子脩設太学、豈但使人游談中。高揖而去、不復与言。

とある。

(30) 『後漢書』伝五七党錮列伝。

(31) 「党錮と学問——とくに何休の場合——」(『東洋史研究』三五—三、一九七六年。のち『六朝精神史研究』第一部第一章所収、同朋舎、一九八四年)。

(32) 『後漢書』伝三四徐防伝に、

伏見太学試博士弟子、皆以意説、不修家法、私相容隠、開生姦路。(中略)臣以為博士及甲乙策試、宜從其家章句、開五十難以試之。

とあり、続いて「詔下公卿、皆從防言」とあることから、徐防の射策改正案は承認されて実行に移された。

(33) これについて『後漢書』儒林伝では、太学の規模を拡大し射策科の任用枠を広げ、さらに大將軍以下六百石までの官僚の子弟を就学させたことを挙げるが、それよりも『後漢書』伝五一左雄伝に、

有志操者、加其俸禄。及汝南謝廉・河南趙建、年始十二、各能通經、雄並奏拜童子郎。於是、負書来学、雲集京師。

とあるのに注目したい。すなわち、年齢や出身に関係なく実力があれば、必ずしも射策科によらなくとも官僚に取り立てることを明示したことによって、太学に学ぶ者が増え

たと考えた。

(34) 『後漢書』仇覽伝。

(35) 『通典』卷一三選舉典一に、

其後復制、学生滿二歳、試通二經者、補文学掌故。其不能通二經者、須後試復隨輩試、試通二經者、亦得為文学掌故。其已為文学掌故者、滿二歳、試能通三經者、擢其高第、為太子舍人。其不得第者、後試復隨輩試、第復高者、亦得為太子舍人。已為太子舍人、滿二歳、試能通四經者、擢其高第、為郎中。其不得第者、後試復隨輩試、第復高者亦得為郎中。已為郎中、滿二歳、試能通五經者、擢其高第、補吏、隨才而用。其不得第者、後試復隨輩試、第復高、亦得補吏。

とあり、同文は『文獻通考』卷四〇學校考一にも収められている。

なお、この規定が出された年代については明らかにできないが、『通典』『文獻通考』のいずれも、桓帝の永寿二年(一五六)に出された任用規定の直後に置かれ、また『文獻通考』では、この文の後に「靈帝熹平四年」と段落を変えて靈帝期の任用規定が置かれており、他によるべき史料がないので、永寿二年以後の桓帝期にこの任用規定が出されたと考えた。

ところで、桓帝期から獻帝期にかけて射策科の任用規定に関する史料が五つある。それを時期的に早いものから挙げると、建和(一四七—一四九)の初、永寿二年、右に引

いた史料（以上『通典』『文獻通考』）、靈帝熹平五年一二  
月、獻帝初平四年（一九三）九月（以上『後漢書』本紀、  
及び『文獻通考』）である。このように頻繁に任用規定が  
出されるようになることは、射策科がもはや恒常的に行わ  
れなくなり臨時的になったことを意味するのであろう。ま  
た、靈帝期と獻帝期のものは、いずれも六十歳以上の太学  
生を対象としており、党錮事件以後の太学の衰退ぶり、と  
博士弟子制度がもはや当初のものと全くかけ離れたものに  
なってしまうていたことを物語る。

(36) 『後漢書』紀九獻帝紀、初平四年九月の条。

(37) 次の三国時代に太学は、魏で文帝の黄初五年（二二四）  
に建立されるが、そこはもはや学問の場でも人脈形成の場  
でもなく、ただ徭役を避けるための場となっていたことは、  
『三国志』卷一三王肅伝注に引く『魏略』や同卷一五  
劉靖伝の記事からうかがえる。

(38) 前稿で取り上げた明経によって郡県吏となった者たち  
が、どのような登用法によって就官したかを見ると次のよ  
うになる。

孝廉——王吉・蓋寛饒・鮑宣・龔勝  
辟召——諸葛豊・孫宝

その他——梅福・張禹

(39) 永田英正「漢代の選挙と官僚階級」（『東方学報』）「京  
都」四一、一九七〇年）、一七六頁参照。

(40) 『漢書』卷五六董仲舒伝。

陛下親耕藉田以為農先、夙寤晨興、憂勞万民、思惟往  
古、而務以求賢、此亦堯舜之用心也、然而未云獲者、士  
素不厲也。夫不素養士而欲求賢、譬猶不琢玉而求文采  
也。故養士之大者、莫大庠太学。太学者、賢士之所閑  
也、教化之本原也。今以一郡一国之衆、付亡応書者、是  
王道往往而絶也。臣願陛下興太学、置明師、以養天下之  
士、数考問以尽其材、則英俊宜可得矣。今之郡守・県令  
民之師帥、所使承流而宣化也。故師帥不賢、則主德不  
宣、恩沢不流。今吏既亡教訓於下、或不承用主上之法、  
暴虐百姓、与姦為市、貧窮孤弱、冤苦失職、甚不称陛下  
之意。是以陰陽錯繆、氣充充塞、郡生寡遂、黎民未濟、  
皆長吏不明、使至於此也。

夫長吏多出於郎中・中郎、吏二千石子弟選郎吏、又以富  
貴、未必賢也。且古所謂功者、以任官称職為差、非謂積  
日累久也。故小林雖累日、不離於小官、賢材雖未久、不  
害為補佐。是以有司竭力尽知、務治其業而以赴功。今則  
不然。累日以取貴、積久以致官、是以廉恥實乱、賢不肖  
渾轂、未得其真。臣愚以為使諸列侯・郡守・二千石各挾  
其吏民之賢者、歲貢各二人以給宿衛、且以觀大臣之能。  
所貢賢者有賞、所貢不肖者有罰。夫如是、諸侯・吏二千  
石皆尽心於求賢、天下之士可得而官使也。徧得天下之賢  
人、則三王之盛易為、而堯舜之名可及也。毋以日月為  
功、実試賢能為上、量材而授官、録德而定位、則廉恥殊  
路、賢不肖異処矣。陛下加惠、寬臣之罪、令勿牽制於

文、使得切磋商之、臣敢不尽愚。

なお、董仲舒の第二対策については以前からその信憑性について疑問視されてきたが、富谷至氏によってそれが董仲舒の者と見て差し支えないことが明らかにされた（前掲註（1）の富谷論文）。またたとえ第二対策が董仲舒自身のものでないとしても、博士弟子制度や孝廉科が創始される以前の儒家官僚や「知識人」が、太学や新たな登用法の必要性をいかに考えていたかを知る史料としては、十分に有効性があると考ええる。

（41）武帝期以後の各時期にどれほどの者が孝廉に察挙されたかについては、前掲註（9）の拙稿一覽表参照。

（42）前掲註（39）の永田論文参照。

（43）元帝期に儒家官僚が官僚機構の重要なポストを占めるようになることについては、平井正士「漢代に於ける儒家官僚の公卿層への浸潤」（『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集——』所収、国書刊行会、一九八二年）を参照。ここで氏は、一覽表によってその状況を示している。

（44）なお、博士弟子制度が成功し、太学のみならず地方社会においても広範に「知識人」を養成したことによって、儒学は思想史上でも新たな発展を遂げた。それは、経文解釈

の多様化であり、今文古文の対立であり、讖緯思想の出現である。そこには私塾の存在も無視できないであろう。本来これらについても本論との関連で検討すべきであったが、言及できなかった。他日に譲りたい。

#### 〔補註〕

前稿発表後、この拙稿に対して多くの先学諸氏から御批判・御教示を賜わった。本来ならば、本稿においてそれらを反映させなければならなかったが、前稿発表時にはすでに本稿を脱稿しており、それはできなかった。なお、博士弟子制度を含めて漢代の教育については、検討すべき問題が多く残されていると考える。そこで、前稿に対して賜わった御批判・御教示については、本稿に対するものも含めて、他日に稿を改めて論ずる時に必ず参考させていただく。ここに、貴重な御意見を寄せていただいた諸氏に御礼申し上げるとともに、本稿でそれを反映できなかったことについてお詫びしたい。

#### 〔付記〕

本稿は、「漢代における官吏登用と教育」に対して交付された平成二年度佛教大学会特別研究助成費による研究成果の一部である。

